

バンコク日本人学校（泰日協会学校）での三年間

平成 22 年度 バンコク日本人学校中学部 派遣

小樽市立桜町中学校 教諭 小林正枝

1 タイの概要

国名 タイ王国

首都 バンコク（タイ人は「クルンテープ」と呼ぶ）

※「天使の都」という意味であるが、これは、とても長い正式名称の最初の部分である。

時差 日本からマイナス 2 時間

面積 日本の 1.4 倍

気候 熱帯（雨季と乾季に分かれるが一年中暑い。3～5月
は特に暑く、暑季とも呼ばれる）

政治 立憲君主制（現在の国王はプミポン国王）

人口 約 6,500 万人（うち、在留日本人は約 4 万人）

バンコク 約 600 万人（同 約 3 万人）

人種 大多数がタイ族 他に華僑 南部にマレー系民族

言語 タイ語

宗教 仏教徒が多い。

南部にはイスラム教徒もいる

教育 6・3・3・4 年制（義務教育 9 年）

通貨 バーツ 1 バーツ 3.2 円

（2013 年 9 月現在）

※ データは在タイ日本国大使館の HP を参照した。



バンコク都内を流れる
チャオプラヤー川



バンコクの街を走るトゥクトゥク

2 バンコク日本人学校の概要

正式名称 泰日協会学校（英語では「Thai-Japanese association school」・タイ語では「ロン
リアン サマコン タイ イープン」という。）

歴史 1926 年創立の盤谷日本尋常小学校（1927 年からは盤谷日本国民学校に改称）を前身と
する、日本人学校の中で最も長い歴史を誇る小中併設校。

在籍数・2012 年度の子童生徒数は約 2,700 人（中学部は約 500 人）

学級数は小学部 60 学級、中学部 15 学級。

・特別支援学級（「なかよし学級」）も 3 学級ある。

・教職員数は約 170 名（日本人約 100 名・
タイ語教員約 10 名・英会話教員約 10 名・
他、事務や用務員などの現地スタッフ）

行事 ・タイの現地校との交流学習会（中学部はタイの
大学や現地のインターナショナル校への訪問・
交流も行う）



担任した中 3 の昼食（弁当）風景
教室はクーラー・扇風機付（弁当の腐敗
を防ぐため、移動教室の際も止めない）

- ・ 修学旅行（小6 チェンマイ・中2 シンガポール）
- ・ 11月上旬に小中合同の運動会（本校の第1グラウンドで行う。児童生徒に保護者や来賓も合わせると約8000人が集まる）
- ・ 中学部には文化祭はなく、9月下旬に合唱コンクールが行われる。

特色

- ・ 小学部6年は全教科で教科担任制をとっている
- ・ 中学部1・2年は 数学科の少人数指導を行っている
- ・ 小学部3年生以上に週1～2時間の英会話の授業がある。
（指導はネイティブの英会話教員が行う）
- ・ 小1～中2は週1時間のタイ語の授業がある。
- ・ 全学年通年で週1時間の水泳授業がある。
（校庭の50mプールを使用して、体育科教員とタイ人コーチが指導する）



下校の様子 バスの駐車場はもう1か所ある

- ・ 土曜登校日がある（中学部では月2回、3時間の午前授業を行う）。
- ・ 児童生徒の8割がバス通学をしており、バスの数は約120台。一台ごとに担当教員がおり、下校時は毎日全員がいるかチェックする。全車のチェックが終了するまではバスは発車できないし、発車が遅れると渋滞に巻き込まれるのでこの業務には神経を使う。赴任した頃、上の年次の先生方に「命の次に大事なバス（チェック）」と言われた。自家用車で通学する児童生徒もいるが、どんなに近くに住んでいても保護者のピ

ックアップが必要で、生徒一人での徒歩通学は認められていない。渋滞を避けるため、登校バスは7時すぎに学校に到着し、下校バスは15時50分（6時間授業）に発車する。

3 バンコク日本人学校の一年間 ※ 中学部教員の生活を中心にまとめました。

4月	上旬	受け入れ	新しい先生をお迎えするために、全職員が「住宅係」「ホテル係」などに分かれて作業する（準備は前年から始める）。
	下旬	着任式 始業式 入学式 （2012年度は4月19日）	着任式（離任式）は本校で一番大きな体育館（冷房設備もある）で行われ、小1・中1を除く全児童生徒が集まる（離任式は小6・中3を除く全学年）。この時、体育館には2500人程度が集まる。着任式の時、2000人以上の子どもが一堂に会している光景を生まれて初めて見た。 ※ 業務とは関係ないが、この時期には新しく赴任した教員の歓迎会が行われる。100人以上が出席するため、会場はホテルを使い、食事はbuffet形式。全員一斉には取りに行けないため、「食事権争奪クイズ」というものを、学年毎のチームになって行い、クイズに正解した学年から食事をとりに行く。幹事の割り当ても学年毎の当番制である。

5月	上～中旬	授業参観	<p>学年ごとに授業参観が行われる。保護者数が多く（母親は基本的に全員出席、夫婦で出席する家庭も多い）、学年毎に行わないと駐車スペース（立体駐車場とグラウンドが車で埋まる）がないし、周辺に大渋滞が起こるからである。出席は一家庭二人までという制限がある。当日は教室に入れずに、廊下で参観する保護者もいる。学校に対する保護者の要求や関心は高い。</p>
	上旬～9月上旬	学校説明会	<p>タイ国内のインターナショナル校や日本国内の私立高校（私立中学校）の学校説明会が行われる。生徒数が多く、進路先も多岐にわたるため、日本から来タイされる高校の数も多い（多くが関西・関東圏だが、道内では函館ラサール・立命館慶尚高校の先生も来タイして説明会を行う）。</p> <p>説明会は午後から本校の多目的室で開始され、保護者だけでなく生徒も参加できる。</p>
	下旬～	1年目のタイ語研修	<p>本校はタイの私立学校という位置づけにあるため、1年目の教員はタイ国内の教員免許を取得することになっている。そのために、一年間、校内でのタイ語の授業（週2回、勤務終了後に各90分）をうけなければならない。会議よりも優先される。</p> <p>※ 昔は一年の終わりにテストがあって、それに合格しなければ免許が下りず、帰国しなければならなかったそうである。</p>
	下旬	交流会	<p>中学部では、「チュラロンコン大学（タイの東大といわれるエリート校）付属中学校」との交流会が行われる。互いの文化交流を目的とした行事で、交代でホスト役を行っていた。</p> <p>これに先立ち、教員同士の交流会も行われ、チュラロンコン中学校主催の時は大学の食堂で、日本人学校主催の時はホテルで行われ、互いの文化の紹介や会食を行っている。</p> <p>2012年度からは、中1同士の行事となった。中2・3はインター校やタイの大学生との交流を行っている。</p>

交流会で書道を紹介する生徒
(2010年度)

6月	下旬	定期テスト	<p>定期テストは年間4回ある。しかし、中3は受験の関係で3学期に行われるテストを実施しない。</p> <p>※ 中3の教科担任は2学期末に学年末の評定も一緒に出す。</p>
	中旬	クラスマッチ	<p>球技大会がないため、学年ごとのクラスマッチと呼ばれるスポーツ大会が行われる。体育委員会が中心となって企画運営する。場所や用具の関係で、行われる種目は、バスケットボール・バレーボール・サッカーである。</p>
	8月	上旬	終業式

		入学が決まり、9月の新学期に合わせるために退学する者も多い。7月末はどの担任も「退学書類」（指導要録など）の作成に忙しくなる。2012年度、自分が担任した学級で1学期に退学した生徒は3名、2学期途中でさらに2名いた。
	夏季休業	長期休業の時には、1～2回の日直が当たる。8時出勤～4時退勤で電話対応や校舎の見回り、中学部教員にはアロワナ（中学部で飼っている）の観察もある。
	職員研修	



南部では高校生にひらがなと消しゴムハンコの作り方を教えた。ムスリムのため、女生徒は白や黒の布をかぶる。



東北部では小学生にカルタ遊びを教えた。タイの学校はポロシャツが制服になっているところも多く、この学校もそうだった。



東北部の小学校の音楽室の様子。教室内にある楽器はこれがすべてで、机椅子はなく、床に直接座って授業を受けるそうである。

バンコク日本人学校では毎年、タイ国内の現地校に「タイについての見聞を広め、日本の文化を伝える」ことを目的にした職員研修を夏季休業中に行っている（2泊3日）。

タイ南部・北部・東北部と毎年地域を変え、三年間参加するとタイを一回りできるようになっている。研修係の教員が、前年度から旅行者と交渉しながら、訪問校や宿泊ホテルやバスなどの手配をし、計画する。私は2010年度、南部のナコンシータマラートへ、2012年度に東北部のウドンターニーへの研修に参加した。

2011年度の夏季休業には、チェンマイ補習校（タイ国内の補習校はプーケットにもある）への出張授業に（4泊5日）参加したため、職員研修には参加しなかった。補習校への出張は赴任期間中1回しか行けず、参加できたのは幸運であった。補習校は毎週土曜日に開校され、チェンマイ在住の教員免許をもった方が国語・数学を中心に教えているそうである。生徒は、月～金曜日は現地校やインター校に通っている。夏季休業中の授業は自由参加ということで、3名の生徒に国語や理科の授業を行った。補習校内では「日本語で会話をする」ことを約束にしていたが、中学生は休み時間にタイ語でおしゃべりしていた。

※ 2学期に入ると進路業務が本格的に始まる。10月から海外入試や帰国生入試が行われるので、中3担任は夏休み中から個人調査書の準備を始めなくてはならない。公立・私立合わせて10校近くの高校を受験する生徒もいる。多くの学校の書類はパソコンで作成できるが、首都圏には「手書き」指定で、調査書以外の提出物が多い学校もあって、進路業務は大変だった。2校しか受験しない生徒が多い北海道を懐かしく思った。

また、北海道以外には「ランク」がないことを、バンコクに来て初めて知った。

--	--	--

9月	1日	始業式	<p>2学期の始業は9月1日で、本州と同じである。</p> <p>始業式の週の終わりに第2回定期テストを行う。第2回の授業参観もこの週に行われる。(1回目は学級担任が、2回目は教科担任が行う)</p>
	下旬	合唱コンクール	<p>各学級1曲ずつを歌い、学年毎に最優秀賞を目指して競う。審査員は管理職と小中の音楽専科の教員が受け持つ。学級単位で行う行事が少ないため、合唱コンクールに力を入れる生徒が大変多く、合唱のレベルも高い学級が多い。</p>
11月	上旬	運動会	<p>運動会はバンコク日本人学校の代表的な行事である。</p> <p>当日は、渋滞を避けるため、近辺の道路を通行止めにし、一般車両は侵入不可にする。保護者の行き帰りもバスを申し込んでもらい、自家用車やタクシーでは学校まで来ないようお願いする。</p> <p>競技は、全9学年を赤白に分け(1300人ずつ)、中3生から応援団長を選出し、各競技に点数をつけ、勝敗を競う。中学部の競技は、リレー・ダンス・棒き(女子)・騎馬戦・棒倒し(男子)など、伝統的な種目が多い。当日のプログラムは全て分刻みで、遅延は許されない。</p> <p>炎天下、小中合同で行うので待ち時間が長く、児童生徒席はすべてテントの下、弁当はクーラーを利かせた各教室に保管し、午前の部終了後は教室に戻って昼食をとってから午後の部を開始する。</p> <p>小中併設校でありながら、大規模校で異学年交流の機会をあまり多くもてないため、高学年のリーダーシップを育成・発揮する行事ともなっている。</p>
 <p>2012年度の運動会の様子 中学部初の種目として学級対抗2人3脚(34人35脚?)を行った。 ちなみに、ポロシャツとハーフパンツが小中共同年通しての体操服である。</p>			
12月	下旬	終業式	<p>中3生は、この冬休みから受験のために一時帰国する生徒が大変多い。すべての受験が終了するまで戻ってこない生徒もおり(受験のたびに帰国すると旅費がかさむので)、そのため、私立高校への出願書類(調査書など)はこの終業式までに完成させ、生徒に手渡すことになっている。(調査書は出願の際に保護者が高校へ提出するようお願いしている)</p> <p>※ 公立の調査書は1月末に渡す。中3担任は11月から12月の間は、評価(2学期分と学年末分)と重なって大変苦しい時期になり、退勤時間も遅くなる。</p>
1月	6日	始業式	<p>冬季休業は2週間余りである。中3生は、各学級とも1月中に3分の1ほどが一時帰国でいなくなる。2月に入るとさらに減り、2月の最終週頃に(受験が終了し、卒業式が近づくため)9割近くの生徒が学校に戻ってくる。</p>

2月	中旬	大使館訪問	中3は、国際理解学習の一環として在タイ日本国大使館を訪問し、在外に住むことの意義や、安全に海外で暮らすために尽力してくださっている大使館の存在について考えさせるきっかけとする。大使と面会し、お話を聞くことができる。
3月	1日	卒業式	小6は午前、中3は午後から卒業式を行う。小学部は児童・保護者ともに人数が多く、体育館に入らないため、小5のみが出席し、他の学年は休業日となる。中学部は全学年が出席する。
	中旬	修了式 離任式	着任式と同様、全児童生徒が集まる。離任する教員も大変多く時間がかかるため、挨拶は一人10秒以内となっている。
		春季休業	（この後、日本人学校は4月上旬に受け入れや新年度業務のための出勤日以外は4月下旬まで春季休業となるが）タイの学校は春休みが一番長く、5月の下旬まで春休みだそうである。しかし、一番暑い時期なので当然かもしれない。 逆に、年末年始は31日の夜中に花火が上がり、元日がお休みだけで冬休みはなく、2日から普通に学校がある。 ※ 4月の半ばには「ソクラン（無礼講の水かけ祭り）」というタイの旧正月がある。街のどこに行っても容赦なく水をかけられるので、私はこの期間には外出しないようにしていた。

4 その他

生徒の国籍…8割以上が父母ともに日本人の子女であったが、2割近くが父母のどちらかがタイ人（母がタイ人である組み合わせが多かった）の二重国籍の生徒であった。他にも、三年間で韓国・アメリカ・フィリピン・マレーシア・ドイツ国籍をもつ生徒を受け持ったが、日本語での会話に不自由のある生徒はいなかった。

また、生まれた時からタイ、あるいは海外在住で、日本での生活経験がない生徒も在籍していた。そのような生徒の中には進学のために初めて親元を離れ、日本で寮生活をする者もいたが、なじめずに退学し、バンコクに戻ってインター校でやり直すことになった生徒もいた。

2011年のデモ…赴任早々、5月にUDD（反政府）のデモで休校になった。その頃は海外生活に慣れることでいっばいで、当時の社会の状況をうまく呑み込めていなかったが、放課後、突然に職員召集がかかって、「明日から休校になります。」と告げられた。生徒には、学級連絡網で休校を知らせた。



自宅ベランダから見たデモの様子
(タイヤを焼いていたらしい)

管理職は、常に大使館や理事会と連絡を取っていた。デモの拠点は住居からも学校からも遠い位置で、何の危険もなかったが、そちら方面には絶対に行くなと言われ、自宅待機か学校で勤務しているかという状態が2週間近く続いた。

生徒の状況把握が大変で、帰国や（郊外への）避難の連絡をしたり受けたりと、忙しかったことを覚えている。日本からは「大丈夫か」という便りを多くいただいた。

2011年の洪水…この時は昼休みに召集がかかって、翌日からの休校を告げられた。運動会を一カ月後に控え、全校生徒での初練習があり、これから忙しなるぞという日だった。

夏からアユタヤ（バンコクの北）の被害が報道されていたが、学校付近は全く何の影響も見られなかったため、暢気に構えていた。実感がわかかなかったが、その後、生徒の中に自宅が浸水などの被害に遭った者も出た。



洪水の様子

場所は学校よりも7キロ北西にある、観光で有名なチャトチャック市場付近。

教員の間で「水が来たら長靴が必要だ」ということになり、急いで買いにいった。このころは、多くの店で長靴が売られていた（普段は店に長靴などは置いていない）。長靴だけでなく、避難用のボートを売っている店もあった。当然だが、長靴はこのような時以外、履かなかった。



水は、結局は学校にも自宅にも来なかったが、生徒がどんどん父親の会社の命令で帰国したり、南に避難したりしてバンコクを離れた。自分の学級で、最後までバンコクにいた生徒は2名だったと記憶している。

街からは車や人がどんどん減っていき、観光客も来なくなかったので静かになった。空気もきれいになったように感じた。ただ、街の営みは普段通りだった。道端には屋台があり、スーパーからは報道のとおり、水、インスタント食品などが棚から消えたが、どこも開店していた。自分は単身だったので、それほど備蓄に神経質にはならなかったが、小さいお子さんのいる教員などは食料面でも衛生面でも不安そうだった。後日、家族には帰国許可が下りた。

毎日、保護者から「社命が出たので帰国する」「日本の中学校に体験入学するので書類がほしい」などと、連絡が入った。困ったのは「(学校が再開すればバンコクに戻っていいと本社が言うので)再開のめどを教えてほしい」という保護者の要望だった。管理職からは「保護者とは、再開の日について話さないこと」と言われていたので「すみません」を連発した。本社の指示も、日本人学校の決定は大きな判断材料になっているようで、日本人学校の責任の重さを知った。

一カ月ほどで学校は再開したが、運動会は中止、定期テストも中止され、授業の遅れを取り戻すために、授業は年度末まで週6日制（月～金は6時間・土曜日は3時間）になり、週末は大変疲れた。



2010年度10月に、教科部会（国語科）の研究授業を任された。準備は4月に始まり、部員による指導案検討が何度も行われる。当日は、多くの教員に参観していただいて様々な指導を受け、大変勉強になった。



東北部の田舎の学校への訪問
タイでは王妃の誕生日（8月12日）が「母の日」にあたる。学校は休日だが、学校で母親への感謝の気持ちを表すために踊りや歌を披露し、花やカードを贈る。感極まって涙を流す子供や母親もいる。



バンコクの三年間で自分が一番多く発した言葉は「眠い」だ。常に時間に追われていた。また、自分はバンコクで二番目の年長だったが、経験年数よりも年次の上の先生が（派遣教員としても海外在住者としても）先輩であり、特に一年目は新卒教員のように教わることばかりで、自分の今までの経験は何だったのかと自己嫌悪に陥ることも多かった。

しかし、授業準備や業務（特にさまざまな書類の作成）には多くの時間を割かなければならなかったが、求められていることに応えようと必死で頑張ったことは現在の自分の力になっている。また、日本人学校（特に大規模校のバンコクにおいて）で一番大事な「協調性」「柔軟性」「向上心」が多少身についた。そして、全国から集まった仲間と意見交換をしたり、知恵を出し合ったりして働けたことや、これまでの経験を生かす機会もあり、大変意義ある三年間となった。

また、機会は限られたが、休日には同僚と共にタイの文化を理解しようと、バンコク都内や国内の様々な地を訪れて見聞したり、現地の方と交流したりすることができた。実は、赴任するまでは、タイのことを全くと言っていいほど知らず、赴任先決定の連絡を受けた時「バンコク日本人学校です」と言われて、「（「バンコク」って国だっけ?）」と思うほどであった。タイの人々は温厚で、親日家が多く、生活する中で不愉快な思いをしたことはほとんどなかった。

今回の派遣のために、多くの先生方のご尽力をいただいた。後志国際理解研究会の先生方には、バンコク赴任後も何度も励ましのお便りをいただいた。この場を借りて厚くお礼を申し上げ、今後、この経験を後志の子どもたちのために役立てたいと考えています。ありがとうございました。